２０２１年　Ｓｐｒｉｎｇ　　No.１４９

みくに

端午の節句

社会福祉法人　みくに園
障害者支援施設　みくに成人寮
ＴＥＬ：(０８７９)６８－３１０４　ＦＡＸ：(０８７９)６８－３９２０
〒７６１－４６６１　香川県小豆郡土庄町豊島家浦９０２－１
ＨＰ：ｈｔｔｐ://ｗｗｗ．ｔｅｓｈｉｍａｍｉｋｕｎｉｅｎ．ｃｏｍ

わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。

（ローマの信徒への手紙　１５章１節）

弱い者の弱さを担って立つ

業務執行理事(副理事長)
日本音楽療法学会 認定音楽療法士
山田　久美

2020年3月11日、第126回みくに園理事会に於いて業務執行理事(副理事長)に任命された。私の仕事は2018年12月29日に90歳で天に召された髙田久初代理事長(みくに園設立者)が生涯持ち続けた『障害者の幸せを願う熱い思い』を受け継ぎ、後世に伝えることである。

父である故理事長は、福祉の仕事に従事する前は長年サラリーマンとしてコンピューター関係の仕事に就いていた。老後は退職金でマイホームを建てることを家族も楽しみにしていた。しかし、若い頃からのマイホームへの夢を捨て、退職金等全ての資金をみくに園の建設費用に献げた。それは『弱い者の弱さを担って立つ』というキリスト者としての強い信念があったからである。そして、故理事長の最も近くで仕事をしてきた一人である私に「知的障害を持って生まれて来た人達は、健康な私達に代わって『障害』という重荷を背負ってくれているのである。私達は彼らの心からの叫びに寄り添い、障害があっても喜びや希望を持った幸せな人生が歩めるように、知恵を結集して努力する必要がある。」と常に語っていた。利用者さんの中には今でも故理事長を「寮長先生」と慕い、一緒に旅行に出掛けた時の写真を音楽室まで持参して、思い出を語る人がいる。彼女は故理事長の仕事場であった理事長室の前を通る度に手を合わせ、自分の大切なお菓子をお供えする。

みくに園は1985年に設立され、熱意ある先輩職員や保護者の方々に支えられて、昭和・平成・令和と36年間走り続けてきた。福祉や介護の専門職はもちろんのこと、医師、看護師、管理栄養士、システムエンジニア、みくに船の船長、ケーキ職人、そして音楽療法士等、多岐にわたる職種の人が働いている。個々の職員が専門知識を出し合い、得意分野で力を発揮して『利用者さんの幸せ』という同じ目的に向かって日々努力を重ねている。豊富な人材に恵まれた施設は、故理事長が残して下さった宝である。

これまでの歴史の中で学び培ってきた経験を踏まえて、この春3棟から2棟体制に移行し、利用者さん達の新生活がスタートした。みくに園の明日は、我が子の大切な人生をみくに園に託して下さる保護者の皆様、日々成長を続ける利用者さん達、障害があってもその人らしく生きるための支援を目指す職員達が創っている。保護者・利用者・職員が心と力を合わせて、3つの車輪が前進した先に『みくに園の明るい未来』が待っている。

「利用者さんの幸せを願って努力していますか？」と今日も故理事長が私達を先導して下さっている。今春4月29日、故理事長は天国で93回目の誕生日を迎えた。

みくに船の旅

新型コロナウイルス感染防止の為に、利用者の楽しみである外出や帰省が出来なくなってから１年が過ぎた。いつかは外出できるようになると信じて、施設内で我慢の日々を過ごしてきた。しかし、未だコロナウイルスの終息は見通しが立たず、我慢の日々が続いている。そんな中、少しでも利用者の気分転換になればと思い、みくに船を利用して、豊島周辺をクルージングすることにした。

みくに船に乗ることを利用者に伝えると、みんな久しぶりの外出に喜んで、その日が来るのをとても楽しみにしていた。当日は天候にも恵まれ、青空が広がる春の暖かな陽気。利用者を少人数の班に分け、船内でのマスク着用、手指消毒、座席の間隔を空けるなど、感染防止にも努めた。窓の外の山々には新芽が芽吹き、ピンク色のつつじがアクセントとなりとても綺麗な景色だった。青い海を白い波しぶきを上げながら走る船はみんなの楽しい思いも乗せているようだった。

クルージング後は園で豪華な弁当に舌鼓を打った。おやつには、美味しいスイーツも食べ、思い出に残る１日となった。

「とっても楽しかった。次はいつ行けるん？」「今度は、船から下りて買い物に行きたいなぁ。」と、次の外出を心待ちにしている様子だった。クルージングの後、毎日玄関の椅子に座って出かけるのを待っている利用者もいる。

「後、もう少し、もう少し」と自分に言い聞かせながら、１日も早く元の生活に戻れることを願っている。

（古川　記）

みくにえんのアート活動

タイトル文字：繁朋宏

今回のみくにだよりでは、アート活動メンバーの作品をご紹介します。
２棟体制への変更で環境が変わりましたが、少人数でゆったりと過ごすことができるアート活動の時間が皆さんの気分転換の場になっていれば嬉しいです。

齋藤幸浩さんは、角材に穴をあけ、ネジを締めていく活動に毎週打ち込んでいます。前に締めたネジを１本１本丁寧に外し、また別のところに穴をあける。完成させることが目的ではなく、ドライバーで小さなネジをくるくると回す時間そのものが作品なのです。

室崎彰吾さんは毎週、衣料品カタログの写真を見ながら人物画を描いています。じっくりとクレヨンの色を選び、細かいところまで良く見て丁寧に描き込んでいきます。洋服の模様や重ね着の表現が素晴らしく、ポップで楽しい作品が魅力的です。

繁朋宏さんは、アトリエに到着するとまずクレヨンを使って２～３枚の絵を一気に描きあげるのですが、途中で色鉛筆を取って来て２０分間ほどの「色鉛筆タイム」がはじまります。画材ごとの感触の違いを楽しむことで、活動にリズムが生まれます。

木工がお好きな松本憲武さんが廃材を使って数か月に渡り制作していた棚が先日完成しました。設計図なしで、スタッフと「ああでもない、こうでもない」と相談しながら進めてきた作業。ペンキを２度塗り重ねるなど、こだわりの一品です。

齊藤宏一さんがこの１年ほど取り組んでいるのは、ＰＯＳＣＡというマーカーでクラフト紙に細かい模様を描き込み、さらに上から別の色で新たな模様を重ねてく作品づくりです。大作が完成したので記念撮影。制作モードに入ったときの集中力にはいつも驚かされています。

いつも穏やかな笑顔で文字を書いている河津順一さんの姿を見ていると、ベテランの職人さんのように見える瞬間があります。画用紙の両面に個性的な書体でさまざまな単語を書き込んでいくのですが、文字の向きや配列は変幻自在。まるで文字がダンスを踊っているかのような作品です。

米田信弘さんは色鉛筆で絵を描くのが大好きです。大胆に枠線を描き、その内側を塗りつぶす。色を替えてまた別の形の枠を描き、内側を塗る…というのを、あわてずゆっくり繰り返していくうちに、大好きな歌手やキャラクター、乗り物などが画用紙の中に立ち現れます。何を描いたのかをスタッフに話してくれるまでを含めた一連の流れが米田さんの制作活動です。

今回は「男性チーム編」として、メンバーの活動の様子をご紹介しました。みなさんそれぞれのペースを大切に、毎週楽しく取り組んでいます。女性チームの作品は改めてご紹介いたしますので、どうぞお楽しみに！　　（吉野　記）

ひなまつり

今年のひなまつりは、お雛様を囲んで、甘酒とお菓子でお祝いしました。お雛様の準備は利用者も参加し、一緒に行いました。ひとつずつ半紙を広げ人形の顔が現れると「また、会えたね」とうれしそうな笑顔になる利用者、「ひなあられは？」と花より団子の利用者、段飾りを組み立てながら「ああでもない、こうでもない」と奮闘する職員。今年もみんなでこうして楽しくお祝いできることをうれしく思いました。

お知らせ

※この度、社会福祉法人清水基金からの助成を受け、３番館の介護浴槽の入れ替え、改修工事を行いました。詳細については次号のみくに便りでお知らせします。コロナ禍の中とてもうれしい出来事で励みになりました。

※産前産後休業・育児休業を取得していた柴田が３番館主任として５月から復帰しました。よろしくお願いいたします。

※香川県による障害者支援施設等従事者を対象とした新型コロナウイルス一斉ＰＣＲ検査が実施されました。みくに園では全職員が検査を受け、全員が陰性でした。この結果に油断せず今後も感染予防対策に取り組んでいきます。

※人事について

令和３年３月３１日をもって亀井進吾（副施設長）、丸岩莉奈（生活支援員）、佐藤亜子（調理員）が退職、令和３年４月１日より松下幸子（調理員兼生活支援員）が入社しました。

編集後記

表紙の写真は３番館の玄関の様子です。立派なかぶととこいのぼりの置物は、職員のお父様が焼いて送ってくださいました。花は、職員がかぶとに合わせ家の花壇の花を活けてくれました。なかなか外に出掛けられなくても、季節を感じることができます。こうした日常の小さな気配りも大切にしていきたいと思います。

＊みくにだよりへのご意見をお待ちしています。

Ｅ-mail:kgk03317@nifty.com　　FAX:0879-68-3920

みくにだより編集部：（149号　2021年5月発行）